

乾姜黃芩黃連人参湯

第359条 傷寒本自寒下，医復吐下之，寒格，更逆吐下。若食入口即吐，乾姜黃芩黃連人参湯主之。

乾姜黃芩黃連人参湯方 乾姜 黃芩 黃連 人参各三両
上四味，以水六升，煮取二升，去滓，分温再服。

参考処方

甘草乾姜湯：甘草四両炙 乾姜二両

黃連湯：黃連 乾姜各三両 人参二両他

半夏瀉心湯：黃芩 乾姜 人参各三両 黃連一両他

第359条 傷寒本自寒下，医復吐下之，寒格，更逆吐下。若食入口即吐，乾姜黃芩黃連人参湯主之。

「傷寒で、寒によって下利しているものに医師が吐下を行い、寒格となる。その上さらに誤治の吐下を行い、ついに食事が口に入った瞬間に嘔吐する。乾姜黃芩黃連人参湯がこれを主治する。」

直持

元義の注釈

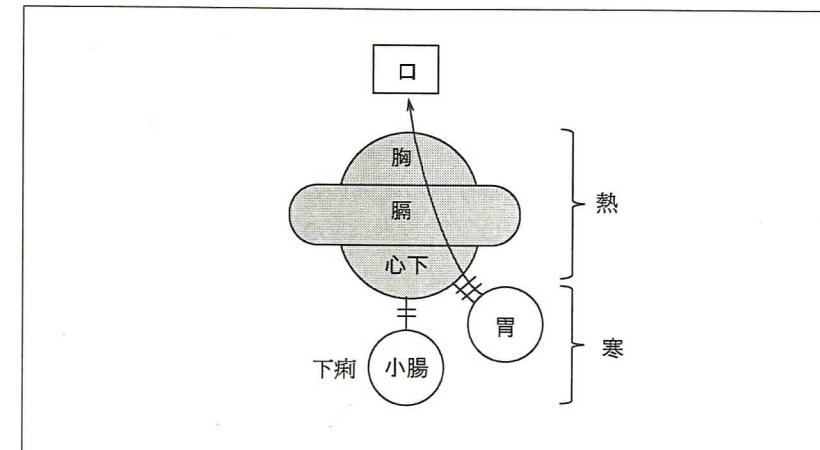
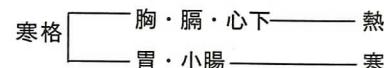
傷寒で、胃、小腸に寒邪の侵襲を受けて下痢が生じる。医はこれを寒邪による下痢とは考えず、たとえば食中毒などによるものと考え、吐かせたり瀉下したりする。そのような誤治のため、ついに「寒格」となる。胃、小腸には寒邪が依然として存在し、胸・膈・心下は逆に熱を持つ。それに対してさらに吐下の誤治を重ね、寒格の状態はますます酷くなる。食事が口に入った瞬間に胃は受納できず、上逆して「嘔吐」する。

[寒格]

寒格と同じ「格」の字を使用する「格陽証」は、表裏で陰陽が解離した状態をいう。「寒格」は、もともと寒邪による下痢に対して吐下の誤治を行い、

生じる病証である。「格」は『大漢和辞典』によると、格子、垣などの意味があり、それより「へだてる」「分断される」の意味に解釈することができる。寒邪の侵入を受けるまでは、比較的陽気の充実した人が、寒邪の侵入を受けこれが裏に入る。陽気は寒邪を駆逐するため、一定鼓舞される。それに対して間違って吐法を行い、本来邪正闘争に向けられるべき陽気は上に昇り、胸・膈・心下は熱を帯びる。さらに間違って下法を行い、胃一小腸の陽気は失われ、寒邪はますます盛んになる。胸・膈・心下と胃の間にあたかも垣根があるごとく、寒熱は相入れず互いに拒みあって、分断されてしまう。そのため食事が口に入ってきたても、胃気は上逆し、嘔吐し、食物を受けつけない。

いずれにしても正気の比較的充実した人に、寒邪がいきなり侵入したため起きた証である。もし陽気が不足した人であれば、寒邪が裏へ侵入しただけで四逆湯証になる可能性は大きいし、これに吐下の誤治を重ねれば、四逆湯証あるいは死に至ることもあり得るであろう。この点が乾姜黃芩黃連人参湯証の特徴であるといえる。



茯苓飲

金匱要略・痰飲咳嗽病脈証併治第十二

第32条 『外台』茯苓飲 治心胸中有停痰宿水，自吐出水後，心胸間虛，氣滿不能食，消痰氣，令能食。

茯苓飲方 茯苓 人参 白朮各三両 枳實二両 橘皮二両半
生姜四両
上六味，水六升，煮取一升八合，分溫三服，如人行八九里進之。

金匱要略・痰飲咳嗽病脈証併治第十二

第32条 『外台』茯苓飲 治心胸中有停痰*宿水，自吐出水後，心胸間虛，氣滿不能食，消痰氣，令能食。

「外台茯苓飲は、心下・胸中の停痰、宿水を治す。自ずと水を吐出すると、心下・胸中の停痰、宿水はいったんなくなる。痰気が心下・胸中に満ちると食べられなくなり、痰気が消失すると食することができる。」

心下・胸に飲（水湿に近いもの）が溜まっている。自ずからその飲を吐出すると楽になり、飲がいっぱいに溜まつくると食事が摂れなくなり、飲がなくなると食べられるようになる。

*痰：古代の痰は淡と同じであり、現代で使用する痰の意味ではなく、飲（水湿に近いもの）である。

処方解説

人参は胃気を守り、他の五味はすべて胸中および心下の飲を捌く。また橘皮、生姜、茯苓、白朮の四味は、胃気を助け鼓舞する。

（胸：茯苓、枳實、橘皮）
（心下：白朮、生姜、枳實、橘皮）

白虎湯類

第170条 傷寒脈浮，發熱，無汗，其表不解，不可与白虎湯。渴欲飲水，無表証者，白虎加人參湯主之。

第176条 傷寒脈浮滑，此以表有熱，裏有寒，白虎湯主之。

白虎湯方 知母六両 石膏一斤碎 甘草二両炙 硬米六合
上四味，以水一斗，煮米熟，湯成去滓，溫服一升，日三服。
臣億等謹按前篇云熱結在裏，表裏俱熱者，白虎湯主之。又云其表不解，不可与白虎湯。此云脈浮滑，表有熱，裏有寒者，必表裏字差矣。又陽明一証云脈浮遲，表熱裏寒，四逆湯主之。又少陰一証云，裏寒外熱，通脈四逆湯主之，以此表裏自差明矣，千金翼方云白通湯非也。

（清・陳世傑本『金匱玉函經』では、この条文の白虎湯が白通湯となっている。）

第219条 三陽合病，腹滿，身重，難以転側，口不仁，面垢，又作枯一云向經譫語，遺尿。發汗，則譫語。下之，則額上生汗，手足逆冷。若自汗出者，白虎湯主之。

第350条 傷寒脈滑而厥者，裏有熱，白虎湯主之。

弁発汗吐下後病脈証併治第二十二

第255条 譫語遺尿，發汗則譫語，下之則額上生汗，若手足逆冷，自汗出者，屬白虎湯。

第26条 服桂枝湯，大汗出後，大煩渴不解，脈洪大者，白虎加人參湯主之。

白虎加人參湯方 知母六両 石膏一斤碎綿裹 甘草炙二両 硬

粳

1) 胃熱および胃津不足による症状

白虎湯証は、胃熱のために「口不仁」(味がわからない)の症状がみられ、一方、白虎加人参湯証は、胃熱および胃津不足による「大煩渴」「大渴」「口燥渴」「渴欲飲水」「渴」「欲飲水数升者」また「舌上乾燥」「口乾舌燥」などの口舌の乾燥症状がある。白虎湯証は胃熱を「裏有熱」と表現し、白虎加人参湯証は「熱結在裏」「表裏俱熱」と表現している。胃熱の程度は白虎湯証の方が重く、白虎湯証は「譫語」、白虎加人参湯証は「心煩」と表現し、逆に胃津不足の程度は白虎加人参湯証の方が重い。

2) 守胃機能失調による症状

① 胃気が上方向へ過剰に向かう。



- I. 胸あるいは心包に、胃気過剰による熱が生じる。白虎湯証では「譫語」が、白虎加人参湯証では「煩」「心煩」「脈洪大」が起こる。
- II. 脉外の気が過剰となり、脈外の気が供給されている肉は熱を持ち、白虎湯証では~~肉に対する正氣（胃氣）~~の供給が不足し、「身重難以転側」を、白虎加人参湯証では「身熱」を呈する。

② 胃気が直達路を介して頭顔部へ過剰に向かう。

胃熱 → 直達路 → 頭顔部

胃気が直達路を頭顔部に向かって過剰に上昇すると顔は垢ですけたようになり、「面垢」を呈する。

③ 胃気が外方向へ過剰に向かう。

胃熱 → 心下 → 肌 (ノ)

胃気が過剰に外肌に向かうと、白虎湯証では「表有熱」に、白虎

加入参湯証では「表（裏俱）熱」となる。

④ 胃気の下方向（腎）への供給不足。

胃熱のために胃気は上・外方向に過剰に出て行くので、むしろ下方向への供給は過少となり、腎は胃気により養われなくなる。



白虎湯証では腎気はむしろ不足し、その表現として「裏（腎）有寒」といい、腎の開闔作用の失調は、「遺尿」を引き起こす。白虎加人参湯証では、腎気不足のために後通の衛気が過少となり、「時時惡風」「背微惡寒者」「惡寒」が生じる。

⑤ 热厥。

胃熱のために守られるべき胃気が守られず、上外方向に過剰となり、該当する場所において熱を持つ。しかし逆に胃熱のために胸・膈・心下の昇降出入が不利すると「厥」を生じる。心下・胸の昇降不利のため、胃気は脈外の氣につながらず、また膈の出入不利のため、胃気は膈から外へ出られず、前通・後通の衛気が過少となり、「四肢の厥冷」を生じる。

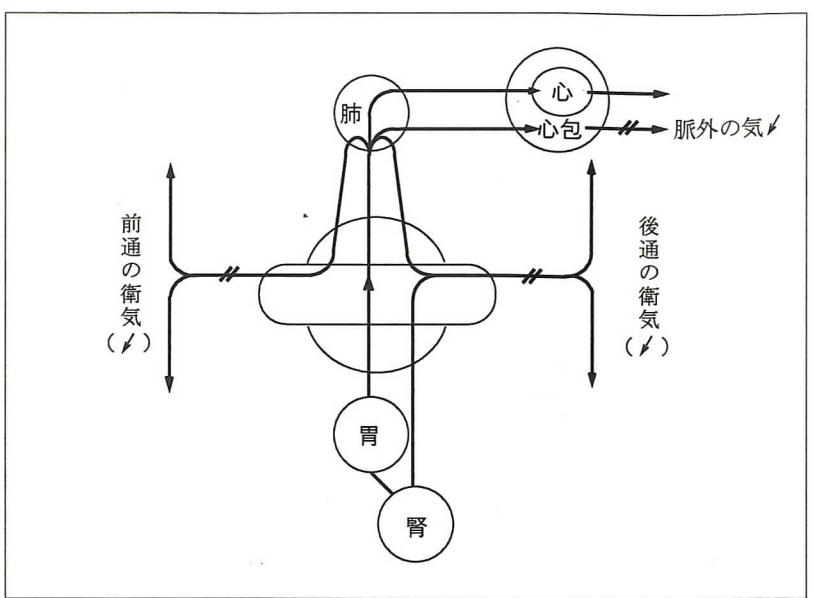
“衰”にあり如く、急に指先から
消える感、いわゆる

白虎湯類

脈に見えるが、~~按する~~とやや軟らかい。この点は、按しても有力な実脈とは異なっている。

⑨ 無大熱。

第169条「傷寒無大熱、口燥渴、心煩、背微惡寒者、白虎加人參湯主之。」の条文は、胃熱および胃津不足により守られない胃気が、主として上に向かい外肌は熱を持つことがないので「無大熱」と記している。また上方に向かった胃熱は、胸に熱を生じさせ「心煩」を呈す。胃熱は上方の胸においてほとんど消費されるため、脈外への伝播は多くはなく、肉中の熱も亢じることはない。



⑥ 腹滿。

胃熱が小腸に及び、小腸も熱を持ち、小腸の伝導作用が失調して「腹滿」を呈する。

寒

⑦ 汗出。

傷寒論第219条「若汗出者、白虎湯主之。」および金匱要略・瘧濕暍病第二-27条「……汗出惡汗、……白虎加人參湯主之。」にみられる汗出は、胃気が上・外方向へ過剰に向かい、腠理は閉じることなく開いているので、脈外の氣、肌気が外泄するものである。したがって白虎湯証、白虎加人參湯証は基本的には鬱熱を生じることはない。

⑧ 脈 浮・滑・洪大。

胃熱により胃気は外殻へ過剰に供給され「脈浮」を呈し、熱を反映して「脈滑」を呈し、心包・脈外の気の過剰および胃津不足を反映して「脈洪大」を呈す。洪脈は『素問』玉機真藏論に「洪脈為來盛去衰」とあるごとく、一定の虚を反映する脈であり、一見盛んな

白虎湯

第170条 傷寒脈浮，發熱，無汗，其表不解，不可與白虎湯。渴欲飲水，無表証者，白虎加人參湯主之。
白虎加人參湯のところで述べる。

第176条 傷寒脈浮滑，此以表有熱，裏有寒，白虎湯主之。
「傷寒で脈浮滑を呈するものは、表に熱があり、裏に寒があるからである。」

総論でも述べたごとく、表熱を反映して「脈は浮滑」を呈する。また胃熱のために胃氣は上・外方向に向かって過剰となり、下方向の腎への供給は減少するため、腎氣はむしろ不足する「裏（腎）有寒」。白虎加人參湯証における「時時惡寒」「背微惡寒」「惡寒」なども、腎氣不足のため後通の衛気が減少したものである。

なお『金匱玉函經』において、白虎湯ではなく白通湯と記してあるが、白通湯証の脈はけっして浮滑とはならない。したがって白通湯と記してあるのは間違いである。

第219条 三陽合病，腹滿，身重，難以転側，口不仁，面垢，譫語，遺尿。
發汗，則譫語。下之，則額上生汗，手足逆冷。若自汗出者，白虎湯主之。

「三陽合病で、腹満、身が重く、寝返りがうてない、味がわからにくい、面はすすぐたようになり、譫語、遺尿（思わず尿が漏れる）し、自汗の出るものは、白虎湯がこれを主治する。このような病証に対して、誤発汗すると譫語はひどくなる。また誤下を行うと額から冷や汗が出て、手足は逆冷してしまう。」

三陽の合病ではあるが、陽明胃熱が中心であり、したがって太陽・少陽の具体的な症状の記載はない。すべて陽明胃熱による症状である。胃熱の

ために味がわからなくなり「口不仁」、胃氣は守られず上方に向かい、胸・心包が熱を持つと「譫語」し、肉が熱を持つと「身重」となり、脈外の氣が外泄すると「自汗出」となり、直達路を面に向かうと「面垢」となり、熱のために垢ですすぐたような顔になる。胃熱が小腸に伝わると小腸も熱を持ち「腹滿」する。胃氣が主として上方に過剰となるため、胃氣は腎を養えず、腎の開闊作用が失調して「遺尿」となる。一説に「胃熱が膀胱に伝わり、膀胱も熱を持つために遺尿が生じる」とするものがある。どちらの説も成立しうるが、白虎湯証の「裏有寒」、白虎加人參湯証の「惡風」「惡寒」などより、腎氣の不足による遺尿としておく。

第350条 傷寒脈滑而厥者，裏有熱，白虎湯主之。
総論において述べたので説明をはぶく。

弁発汗吐下後病脈証併治第二十二

第255条 譫語遺尿，發汗則譫語，下之則額上生汗，若手足逆冷，自汗出者，屬白虎湯。
傷寒論第219条とほぼ同じなので説明をはぶく。
（若の字と219条と同様、自汗出者）
（自汗にむづれく）

処方解説

白虎湯方 知母六両 石膏一斤碎 甘草二両炙 硬米六合
上四味，以水一斗，煮米熟，湯成去滓，温服一升，日三服。

知母、石膏にて胃熱を清する。また胃氣を下・内方に向けて、上・外方への過剰なベクトルに対抗する。知母は清熱のみではなく、胃を潤し、胃氣を腎につなげる。甘草、粳米は守胃し、胃の気津を補う。